「東闕図」にみられる朝鮮時代の宮殿造園における構成要素の特徴

Characteristics of Landscape Architectural Elements in the Royal Palace of Joseon Dynasty on Donggweoldo

金 鉉 竣* 権 孝 姪** 沈 愚 京*

Hyunjun KIM Hyojung KWEON Wookyung SIM

Abstract : Donggweoldo is a painting which was drawn on royal palaces (Changdeok palace, Changgyung palace and Whowon) of Joseon dynasty. The situation of landscape design on 19 century could be grasped from Donggweoldo, because the painting was produced in the 1820s. The purpose of this study is to clarify the characteristics of landscape architectural elements in Korean royal places by analyzing Donggweoldo. To analyze landscape architectural elements and clarify characteristics of those, the elements were classified to spatial elements, house elements, plant elements, water elements, stone elements. The appearance frequency of those elements was different as a role of the place. It is understood that Confucianism was reflected by elements in the place such as Uezo where retainers work or Chizo where is held ceremonies. There are various ornamental elements in Yeonzo where a king and his family live and Whowon which is a large garden where people relax and enjoy nature. Especially in back yard of king's bed house, there are ornamental elements such as flower terrace, various plant, oddly shaped stone. These data is expected to be a fundamental data when royal places restored to original state.

Keywords: Donggweoldo, Joseon dynasty, royal palaces, landscape architectural elements

キーワード:「東闕図」、朝鮮時代、宮殿、造園構成要素

1. 研究背景および目的

「東闕図」は朝鮮時代（1392－1910 年）の正宮¹⁾である景福宮の東側に位置した昌徳宮と昌慶宮の建築物・樹木・施設物などを細かく描写した作品で、5 節 6 面 16 巻の画帖から構成されている。完全に開いた大きさが縦 273cm・横 584cm の大型の絵である²⁾。絵の内容から 1820 年代に描かれたとみられ、現存する韓国の宮殿の絵として規模・内容などのすべての面で、もっとも優れた作品として評価されている。絵画・建築・造園における歴史的な側面から大事な資料であり、さまざまな分野で研究されてきた。

昌徳宮は 1405 年に建てられ、昌慶宮とともに、正宮である景福宮の東側にあることから東闕と呼ばれた。朝鮮時代の宮殿のなかでもっとも長い期間、国王が住んでいた宮殿である。現存している宮殿のなかで、もっともよい状態で保存されている。自然の地勢によって建物が配置され、自然に順応する韓国造園の特徴がよく表現されている。1970 年代から整備がはじまり、1990 年代以降、重要な建物の復元作業が進められ、正殿・寝殿・楽善齋・後苑地域などが復元された。自然と調和した建物の配置などが認められ、1997 年 12 月ユネスコの世界文化遺産として登録された。昌慶宮は 1483 年に建てられた宮殿であり、昌徳宮と繋がり、一つの大規模な宮殿を形成している。

既往研究として、「東闕図」の昌徳宮の造園構成要素の役割について述べたものがあるが³⁾、本研究では造園構成要素を「東闕図」の全体から抽出し、その出現頻度などを整理することで、各要素の意味および役割を明らかにすることを試みた。

本研究は、「東闕図」に見られる造園の構成要素の特徴を分析し、「東闕図」が描かれた 19 世紀の朝鮮時代の宮殿における造園の特徴について調べることで、復元における基礎的資料となることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、韓国ソウル市の高麗大学博物館に所蔵されている

「東闕図」を部分撮影した 24 枚の 4×5inch フィルムを、4,800dpi でスキャンし、そのイメージを利用した。分析のため、昌徳宮、昌慶宮、後苑の 3 つに地域に分け、さらにその各地域を昌徳宮 20 ヶ所、昌慶宮 22 ヶ所、後苑 14 ヶ所に分割した。造園的な構成要素を空間・建築・樹木関連・水関連・石などの要素に分類した。なお、既に研究されている樹木については除外した⁴⁾。

3. 地域区分

分析のため、「東闕図」は図-1 のように地域区分を行った。「東闕図」における宮殿区画の内側を研究対象地とし、建物と区画構成、または空間利用の性格によって、昌徳宮地域は A1～20、昌慶宮地域は B1～22、後苑地域は C1～14 に分けられた（図-1）。C14 の地域は中国明時代の皇帝の法事のためにつくられた皇壇がある地域で、本来は後苑と壁で分離されているが、区分の便宜上、後苑地域に含めた。

宮殿空間を臣下が勤務する官庁がある空間である外朝、正殿および便殿が位置し、国王が政治を勤める場所である治朝、国王・王妃など王族の生活空間である燕朝、そして後苑に分けた。昌徳宮地域では A1, A3, A5, A8, A19, A20 が外朝、A2, A4, A6, A7, A9, A10 が治朝、A11, A12, A13, A14, A15, A16, A17,

図-1 「東闕図」における地域区分

注) A は昌徳宮地域, B は昌慶宮地域, C は後苑地域を示す。

* (韓国) 高麗大学造景学研究室 ** 兵庫県立大学自然・環境科学研究所／淡路景観園芸学校

A18が燕朝に該当する。昌慶宮地域ではB1, B12, B13, B15, B17, B18, B19, B20, B22が外朝, B2, B3, B4, が治朝, B5, B6, B7, B8, B9, B10, B11, B14, B16, B21が燕朝である。

4. 造園構成要素の特徴

(1) 空間要素

(i) 橋

昌徳宮には石橋が6ヶ所、木橋が1ヶ所、昌慶宮には石橋が6ヶ所、木橋が1ヶ所、後苑には石橋が25ヶ所、木橋が4ヶ所描かれていた。橋のほとんどが石橋であることが分かった。昌徳宮と昌慶宮では、木橋はすべてが各宮殿への進入空間にあった。宮殿への進入空間における橋は、川を渡ることが空間の変化において大事な意味をもち、王権を象徴したり、俗世との境界などを象徴したりする⁵⁾。昌徳宮の錦川橋と昌慶宮の玉川橋がこのような意味をもち、これらの石橋は各宮殿の正門から正殿までつながる「御道」に位置している。「御道」は道の真ん中の高さが高くなり、国王だけが通れる道である⁶⁾。身分によって使う道が異なることを考えると、錦川橋の北側と玉川橋の南側(図-2)に設置されている木橋は、宮殿のなかで身分が低い人が利用した橋と思われる。

図-2 「東関図」における錦川橋・木橋(A1)および玉川橋・木橋(B1)

(ii) 御道

御道は正殿の前や宗廟のような儀式が行われる空間につくられている。一般的には真ん中が高く、両端が低い形態であり、真ん中の高い道を国王が通ったといわれる。「東関図」では、御道が各宮殿の正門から正殿まで、そして便殿、寝殿、大妃殿、世子宮(東宮)地域で見られた。これらの空間は、重要な行事や儀式が行われる空間であり、国王および王族の生活空間であることがわかった。

(iii) 板塙

板塙は木の柱の間に板をつけて造られたもので⁷⁾、視線遮蔽の効果および空間分割の機能をもっている。「東関図」では柱に木の板をつけて移動が可能のように造られているものと、地面に固定

されているものが確認できた。移動式のもののは大きさが比較的小さく、主に視線遮蔽の目的で利用されることが多く、固定式は壁のような役割として空間の分割の目的での利用が多かったことと思われる。板塙の色は赤色、緑色、白木色の3種類があり、一般的には赤色が使われた。王妃・大妃の生活空間には緑色がよくみられ、宮殿で働く身分の低い人たちの空間では白木色が使われた。既往研究⁸⁾によると、赤色の板塙は東宮地域で公式の行事が行われる建物に、緑色のものは寝殿および亭子(あずまや)で使われたと報告されているが、今回の分析結果からは、赤色の板塙は東宮地域以外、外朝、燕朝で幅広くみられることがわかった。

(iv) 花階

花階は、斜面のエロージョンを防ぐために細長い石を階段状に積み、複数の平地で作られた構造物である。花木類・怪石・石蓮池などが設置され、美しい景観がつくられるので花階と呼ぶ⁹⁾。比較的規模が小さい空間であるため、そこに植える植物は灌木および草花などであったが、空間に余裕がある場合にはマツ、モミジなども植えられた¹⁰⁾。「東関図」にみられる花階は昌徳宮地域で4ヶ所、昌慶宮地域で8ヶ所、後苑地域で3ヶ所、計15ヶ所がみられる。その位置および特徴は表-1に示した。

花階は地形に沿って建物を作る時に造られ、宮殿空間の性格によって政治が行われた外朝および治朝にはほとんど設けられず、あるとしても地味な灌木類が植栽されている⁴⁾。しかし、燕朝には、花階に多様な広葉樹が植栽され、装飾の効果が望まれていたと考えられる(図-3)。なお、花園空間(B15)は昌慶宮の外朝に属する場所にあったが、用途は植物の植栽することによって装飾的な空間をつくることにあったと推定される。

図-3 「東関図」における大造殿の花階(A11)

(2) 建築要素

(i) 亭子

亭子は、休憩をとったり、周囲の景観を鑑賞できたりする小さな規模の建築物である。昌徳宮では亭子2ヶ所、亭子の跡地1ヶ所がみられた。昌慶宮には4ヶ所、後苑には16ヶ所あった。ほとんどの亭子は後苑にあることがわかった。

(ii) 煙突

煙突は、暖房をとるため木を燃やすときに煙を外に出す建築物

図-4 「東関図」における煙突(A18)

表-1 「東関図」に表れた花階の位置および特徴

区分	空間の役割	位置	段数	特徴
A2	治朝	仁政殿の北側	5段	4-5段目にササ類の植栽
A9	治朝	宝慶堂、泰和堂の北側	3段	宝慶堂の花階だけに罫臺
A11	燕朝	大造殿の北・東側	3段	ツツジ類などの灌木類の植栽
A14	燕朝	景福殿跡地の北側	3段	植栽なし、火災により焼失
B3	治朝	文政殿	2段	植栽なし
B4	治朝	崇文堂の西側	3段	植栽なし
B5	燕朝	景春殿の西側	3段	花木類および灌木類の植栽
B7	燕朝	通明殿跡地の西・北側	北2段 西3段	植栽なし火災により焼失
B8	燕朝	慈慶殿の北側	2段	花木類および灌木類の植栽
B14	燕朝	寿康斎の北側	3段	マツ類 花木類 灌木類の植栽
B15	外朝	花園の北側	3段	翠環の設置および針葉樹2本
B16	燕朝	進修堂の北側	3段	花木類および灌木類の植栽
C2	後苑	宙合楼の南側	5段	翠環の設置および針葉樹2本
C7	後苑	観徳亭の北側	2段	植栽なし
C14	皇壇	皇壇の北側	2段	2段目に多様な樹木類

図－5 現在の大造殿の花階の煙突（A11）

の一部であるが、韓国の伝統造園では、煙突が建物からある程度の距離を離れて設置され、装飾的な要素として使われる場合がある。昌徳宮では単純な形の煙突が4本みられるが（図－4）、昌慶宮および後苑では見られない。現在は昌徳宮の大造殿の花階に煙突が設置されているが（図－5）、「東闕図」には描かれていない。

（3）樹木関連要素

（i）翠屏

翠屏は生きている樹木に手をいれて造った生垣的な壁だが、現存するものはない。「東闕図」には計10ヶ所の翠屏がみられ、その形態および特徴は表－2に示した。

表－2 「東闕図」に表れた翠屏の位置および特徴

区分	空間の役割	位置	形態	役割および特徴
A17	燕朝	重熙堂の前	L字	視線遮蔽
		重熙堂の前	直線	視線遮蔽
		小宙合楼の前	直線	空間分割および遮蔽。台の上に設置
B14	燕朝	翠雲亭の西側	直線	空間分割および遮蔽。門が2つ
B15	外朝	花園の北側	直線	視線遮蔽
		花園の南西側	L字	視線遮蔽
B16	燕朝	時敏堂跡地の南	直線	植栽なし、火災によって焼失
C2	後苑	宙合楼の南側	直線	翠屏の設置および針葉樹2本
		喜雨楼の北側	直線	空間分割および遮蔽。門が1つ
C9	後苑	龍山亭の南側	アーチ型	植栽なし

翠屏は燕朝および後苑空間に設置されたもので、形態は直線型、L字型、アーチ型の3つがある。花階に長く設置される場合、翠屏の機能的特性として、視線遮蔽および空間分割機能をあげられる。素材が植物であったことから、観賞価値があり、周辺の環境とも調和しやすかったと考えられる。「東闕図」によると、宙合楼の前面の花階に翠屏が設置されているが（図－6）、現在は多様な灌木が植栽されている。

図－6 宙合楼の花階の翠屏および芙蓉池（C2）

（ii）花盆

昌徳宮の燕朝空間には、マツの盆栽を植えた石鉢が2個、花木を植えた植木鉢が7個ある。後苑には守直間に花木が植えられた鉢4個がみられる。このことから当時は、宮殿のなかで花木を植木鉢に植えて利用したことがわかる。

（iii）樹木の支柱

昌徳宮の璿源殿の前のイブキに4本、小西齊のとなりのイブキに6本（図－7）、景福殿のイブキに10本の支柱が設置されていた。すべてがイブキに設置されている。現存する図－8のイブキは、「東闕図」と同じ位置にあり、樹齢が700年以上であることから、同じ樹木として見なされている。

図－7 「東闕図」における小西齊のイブキと支柱（A6）

図－8 現在の小西齊のイブキと支柱（A6）

（4）水関連要素

（i）池

「東闕図」における池は、ほとんどが方池の形をしている（図－6）。池の中に中島を造る場合があるが、これには三神山を描いた神仙思想の影響がみられる。また、方池・円池は天円地方と陰陽の結合を象徴している¹¹⁾。昌徳宮に2ヶ所、昌慶宮に6ヶ所、後苑に28ヶ所、計37ヶ所の池が主に燕朝と後苑空間にあった。池の形別に分類すると、方池が35ヶ所、円池が1ヶ所、半円池が1ヶ所であり、池の中に円島があるところが3ヶ所、怪石があるところが3ヶ所であった。これもまた天円地方・陰陽五行および神仙思想の影響であると考えられる。

（ii）井戸

井戸は、昌徳宮に8ヶ所、昌慶宮に22ヶ所、後苑に3ヶ所、計33ヶ所があった。四角形の井戸3ヶ所以外には、すべてが円形であった。井戸は日常生活に必要な水を供給する場所であるため、宮殿全体に分布している。国王が使用するところは、特別に「御井」と呼ばれたが¹²⁾、景薫閣、寿命齊、宙合楼、皇壇の井戸は他の場所と異なって欄干が設置されているところから、「御井」であったと思われる。

（iii）玉流川

玉流川は自然の地勢を利用した韓国庭園の特色が、よく表れている場所である（図－9）。この地域は現在もよく保存されている。玉流川は岩で造られている場所であるため、他の素材より火災などの被害が少なかったと考えられる。

（5）石要素

（i）怪石および石函

鑑賞を目的に庭園におかれた自然石を怪石といい、主に花階、花壇、壁や樹木の下におく。石函は怪石を立たせるための台石の一種で、怪石の台になるところから怪石台とも呼ばれる。怪石をおく場合には石函を使う場合（図－3）と、石函なしで直接地面

図-9 「東闕図」における玉流川 (C6)

に下部を埋めておく場合があった。石函を使う場合には、一般的に石函の三神山を象徴する文章を彫刻したり、装飾をしたりしたが、これは神仙思想の影響であるといわれる¹³⁾。「東闕図」では、怪石は昌徳宮に13個、昌慶宮に1個、後苑に7個で、計21個が描かれ、そのなかで16個が石函の上に置かれていた。昌慶宮にも燕朝空間に1ヶ所の怪石が、方池のなかにあった。怪石は目的が鑑賞であったため、空間の性格上、外朝・治朝空間には設置されず、燕朝・後苑の石函の上に設置されたり、方池のなかに石函なしで設置されたりしていたことがわかった。

(ii) 台石

台石は明かりや草花、石函、日時計などをおく台になるもので、方形、多角形、円形などさまざまな形態をしている¹⁴⁾。昌徳宮では19個、昌慶宮では8個、後苑では6個、計23個があり、主に燕朝空間で見られる。台石の用途が他のものをおくためのものであるため、さまざまの構成要素が現れる燕朝空間でもっともよく見られたと思われる。

(iii) 石獣

石獣は動物を彫刻しておいたもので、象徴的な意味と装飾的な効果をもっている。昌徳宮と昌慶宮では各6個、後苑では5個が描かれている。昌徳宮の錦川橋と昌慶宮の玉川橋に設置された石獣を除けば、すべてが燕朝と後苑空間でみられた。

(iv) 下馬石

馬や駕籠を乗り降りする時に使用する石台である。本来の機能以外に装飾的な効果もある。昌徳宮には正門である敦化門の両側に2つ、昌慶宮に1つ、後苑に4つが設置されていた。

(v) 灯籠

昌徳宮では石灯籠は3個、石ではない灯籠は12個、昌慶宮では石灯籠は6個、石ではない灯籠は1個、後苑では石灯籠は4個、石ではない灯籠は1個が見られた。灯籠はほとんどが燕朝と後苑にあった。

(vi) 品階石

品階石は宮殿の正殿の前、御道の両側に「品階」を書いた石である。「品階」とは官職の階級である。「東闕図」では昌徳宮の正殿である仁政殿の前だけにあり、左右10個ずつ、計20個があった。朝鮮王族実録の正祖1年(1777)4巻に「立品石于仁政殿庭。朝賀班次、每致紊乱、命随品立標、以定班行」という記録があるところから、朝賀の時の乱れた雰囲気正し、列をきれいにするためのものであることがわかる。

(6) その他

昌徳宮・昌慶宮・後苑には、測雨器・小簡儀・日時計・風旗などの科学機器が設置されていた。「東闕図」には、科学機器として日時計がもっとも多く6つで、測雨器が3つ、風旗石が3つ、小簡儀が4つ、計14の科学機器があった。外朝、治朝、燕朝空間で現れ、特に東宮である重熙堂に多く設置されている。重熙堂が皇太子の空間であったことを考えると、その教育において科学が重要であったと推測できる¹⁵⁾。その他、宮殿のなかにある葉屋

に臼、釜などが描かれ、火事を防ぐことを象徴するために大事な建物のそばに防火水をいれておいた、金属でつくられた壺のようなものである「ドム」、味噌などの食料を貯蔵する「醬甕」、池で使う船などがみられた。

5. まとめ

本研究は「東闕図」に現れた造園の構成要素を分析することで、その特徴を明らかにし、「東闕図」が描かれた19世紀初頭の朝鮮時代の宮殿の造園の特徴について考察したものである。「東闕図」には空間・建築・樹木関連・水関連・石などさまざまな構成要素が描かれていた。空間の性格によって、これらの要素の出現頻度が異なった。臣下が仕事を勤める空間である外朝、行事および政治が行われる治朝では、上下秩序をたもつために国王と臣下が使う空間が異なるなど、儒教的思想が造園構成の要素に大きく反映されていることがわかった。国王および王妃、皇太子などの王族の生活空間である燕朝、休憩と自然を楽しむことができる後苑には多様な造園構成要素が現れている。とくに、寝殿の裏には花階が設置され、さまざまな植物を植栽し、その周辺に怪石などの装飾的側面を大きくもっている要素が見られた。怪石および池の形、池に浮かぶ島の形などから、道教の神仙思想および陰陽五行思想の影響を受けていたことを推測できる。井戸、灯籠、醬甕などの要素によって当時の生活状をみることもできた。昌徳宮地域と昌慶宮地域は構成要素の特徴についてはほとんど同じであるが、煙突・花盆・樹木の支柱・品階石・ドムのような一部の構成要素が昌徳宮だけで見られるなど、細かい相違点があった。昌徳宮および昌慶宮は復元事業がすでに進められているが、「東闕図」が描かれた当時のような姿を取り戻すために、多くの努力が必要と考えられる。現在まで、建築物などのスケールの大きいところを中心に復元事業が行われてきた。これからは本研究で分析した造園構成の要素にも目を向けて、ディテールな面においても気を使いながら復元していく必要があるといえる。このような細やかな部分を大切にすることで、各要素がもっている象徴的な意味や機能性を明確にすることが可能になるとと思われる。

補注および参考文献

- 1) 「正宮」は、その王朝において中心となる宮殿である。本来、東闕は離宮として建てられた宮殿である。
- 2) 安輝濬(2002): 古宮殿図: ダイエン社, ソウル
- 3) 白志星・藤井英二郎・仲隆裕・浅野二郎(1992): 韓国・昌徳宮における庭園植栽について: 造園雑誌 55 (5), 1-6
- 4) 金鉉堧・沈恩京(2007): 「東闕図」に表れた植栽現況および特徴分析: 韓国伝統造園学会誌 25 (2), 141-154
- 5) 池錠燮(1994): 朝鮮時代宮闕の造景構成要素に関する研究: 高麗大学校修士論文
- 6) 朱南哲(1997): 韓国建築意匠: 一志社, ソウル
- 7) 柳ジェヒ(1991): 朝鮮時代の宮闕建築の壁に関する研究: 建国大学校修士論文
- 8) 洪善基(1991): 朝鮮時代の宮闕の空間構造に関する研究: ソウル大学校修士論文
- 9) 尹国炳(1986): 造景辞典: 一潮閣, ソウル
- 10) 季瑄(2006): 韓国伝統造景植栽: 樹流山房仲心, ソウル
- 11) 朴吉龍(1984): 韓国庭園の構成要素に関する研究: 韓国庭園学会誌 3 (1), 2-3
- 12) 文化財庁(2002): 昌徳宮, 宗廟, 苑囿: 文化財庁, ソウル
- 13) 全仁順(1990): 朝鮮時代の宮苑の造園要素における宗教的・思想的背景に関する研究: 成均館大学校修士論文
- 14) 朱南哲(1980): 韓国庭園の石物に関する研究: 大韓建築学会誌 24 (2), 34-43
- 15) 文化財庁(2005): 「東闕図」を読む: 文化財庁, ソウル